

さざなみ 平井家の場合

さくら なおき

いつもよりめずらしく早い時間帯に乗ったバスは、人いきれでムンムンしていた。バス停に着くなり飛び出すように降り立った平井陽介は、生暖かな夜風ながらも幾分気分がほころぶのを感じた。汗ばんだ首元を少しでも和らげようと緩めたネクタイ、サマージャケットを手提げかばんに乗っけて、緩やかな上り坂の住宅街を家路にと向かうその足の裏は、さつきに増して靴の中で燃え上がっている。玄関のドアノブに手を掛けたとき、けたたましく電話が鳴っているのが聞こえた。一部防音処置を忘れたカラートタン屋根の雨音でテレビも電話も聞きづらいこともあり、そこで窮余の一策として見つけたのがアイデアショ

ップにあつた缶タイプの小さな拡声器。効果満点もいく分通り越しているようだ。

（誰も居ないはずはない）と思いつつ、左右の靴を脱ぎ飛ばしながら部屋に駆け込み受話器を握った。

「マサヨさん居らっしゃいますか？」

電話慣れした若い女の声だった。秘密の話などとんでもないくらい響いてくる。

そう言えば朝、娘の雅代が出掛けに「今日はお友達とぶらついてくるから」と女房に言っていたことを思い出した。

「雅代はまだ帰っていないようですが・・・」

「何時頃、お帰りですか？」

受話器の向こうで、ガヤガヤとした複数の人の声が聞こえる。

（ああっ、またか）相手の表示番号も見ず手にしたことを悔やみつつ

「今日は戻りません！ 明日もあさつても！」

荒々しくガチャンと受話器を置いた。先方が何か喋ろうとしていたようだがそんなことに構ってられない。

（この手の電話は全くけしからん）

足取り重く帰宅したとたんの電話のベル、慌てて駆け込んだ陽介の身体からまた汗がどつと噴き出してくるのだった。

「あら、お帰りなさい。誰から？」

「なんだ、居たのか。電気も消さずどこに行ったのかと：・例の電話さ」

ちようどてんぷらを揚げていたものだからと台所の女房。

「よく掛かってくるのよねえ：・もうお風呂に入れますよ」と鍋の手を休めず言う。

陽介がステテコ一丁になり汗で湿ったラン

ニングシャツから左手を抜こうとしたとき、またベルが鳴った。不思議なものでベルが鳴ると何を差し置いても受話器に手が伸びるのは、長年の営業マンの習性か。脱げ切れないシャツをそのままに妙な格好で受話器を耳に寄せる。

「マサヨさんいらっしやいます？」

今度は若い男の声だ。しかも実に馴れ馴れしい。

「いまアーせん！」

ガチャリ。受話器が悲鳴をあげている。

我が家にくる電話は圧倒的に娘宛が、しかも男性からが多い。先方の戦略なのか、男子の所へは女性が掛けてくるそうだ。会社名を名乗るとそれで用件を察知されて切られてしまうので、中学・高校時代の友人を装って同窓会がどうのこうのと掛けてくるからしま

つが悪い。この前は、今の時代は資格が必要です。若いうちに勉強されて、とか何とか言っただけ高い教材を売りつけようとするのだ。それも断つても断つてもしつこくくいさがるのである。本人が留守だと少し急ぎの用件だからと連絡先や携帯番号を教えて欲しい、と言う。女房が気を利かして教えると、これがまた母娘喧嘩のもとになるのだった。

陽介にもたまに掛かってくるが、商品相場が面白いとか、リゾートの物件に良いのがあるからなど、話を聞くだけ無駄なものばかりである。文明の利器が今や生活を脅かす凶器になってしまっただけだ。

平井家は女房・娘とメス犬一匹の女系家族。女房の名前は麻世と書いて（あさよ）という。四十代にしては若作りの方か。そして一人娘

は雅代（まさよ）。今年成人式を終えた大学生。若い頃の女房にそっくりの顔形と性格。それに我が家のパグ犬、皺くちやで老けた顔だがまだ女の子、その名がマサヨ。ほんとに最初迂闊にも雄だと思って「マサオ」と付けたのだ。メスと知ったとき犬も全く呼び方の違う名前だと混乱するだろうと人間的な考えで、娘と同じ「マサヨ」にした。何でこんな紛らわしい名前ばかり揃えたのか。それは、陽介が一回呼べば大体みんなに伝わること、それと夫婦喧嘩したときそのしわ寄せを「マサヨ」にぶつける一石二鳥からなのだ。なぜなら「マ」をはっきり言わなければ「マサヨ」は即「アサヨ」となる、父娘喧嘩の場合は名前そのものズバリ。犬の顔を見ながら怒鳴っていればすむ。なにしろ娘ももう大人、一対二で男は歩が悪い。マサヨが敵方に付けば一対

三、家庭内ストレスが部屋中飛び交っているのだ。休日になると似たもの母娘は陽介そっちのけで会話を楽しみ、シヨツピングを楽しんでいる。たまに（あのなあ）と話に割り込もうものなら、野良犬を追い払うように（シツシツ）と手払いされてしまう。そんなとき、

マサヨの頭をなぜながら悲哀を分かち合ってもらうしかないのだと、ある日会社帰りの一杯飲み屋で陽介が同僚に吠えていた。しかし愚痴を聞いてくれる友のいる陽介はまだ幸せで可愛そうなのはマサヨである。優しくマサヨと呼んでくれる声と程遠い「マサヨ！」のトーンの違いを敏感に感じると、コロンとした丸い身体であたふたとしかし素早く狭い小屋に逃げ込む。そしてそのたびに、パグ犬特有の低く上向いた鼻をフガフガさせ唾を飛ばし、三白眼のギョロ目を上下左右に動かし

ながら（ナンダヨー）とばかり、小屋の中からうらめしそうに皺くちやの顔を陽介に向けてのだった。

営業マンの陽介が取引先で見初めた当時の麻世は、小柄で色白で笑うと八重歯の白い歯がこぼれ、それに奥二重で切れ長の目が三日月を伏せたようになる笑顔が特徴だった。

陽介が強引にプロポーズしたそれから二十数年の歳月を経て、陽介の細い身体をあざ笑うかのように麻世は、柔らかい表現を用いれぱく福よかゝに変身した。それもここ三年で見事に完成させてくれた。プロポーズしてから麻世の両親に挨拶に行ったとき、もう少し母親の体軀を観察していれば将来が読めたはずだった。そう云えば、営業部に配属された二十代の頃より、課長から「営業マンとして顧客の動向をしつかりと研究しろよ」と口す

っぱく言われていたものだ。

先日、麻世が久しぶりに出会った友人連。皆、口をそろえて「あら、オメデタ？」のことばが飛び出す。娘が成人式を終えたというのに。

「今日もまた言われちゃった」と自分のお腹を見つめ

「失礼しちゃうわ、まったく。でもよくぞここまで……」

そう言いながら風呂あがりの麻世は、両手でへそ周りの柔らかかなお肉を掴み、陽介の目の前で証明して見せる。弾力性だけは誰にも負けない、引っ張れば十分水も溜まるだろう。他人が思うほど気にしていない様子で白いもち肌がまだ昔を物語っている、と堂々としたものだ。

こんな麻世の趣味のひとつに四年ほど前からの賞品目当てのアンケート出しがあった。スーパーの売り場やチラシ折込み、雑誌などでよく目にするアンケートはがき。それは平々凡々の安サラリーマン女房のささやかなギャンブルになった。

「このアンケートにご応募いただいた中から、抽選のうえ〇名様に××を差し上げます」
お決まりの、住所・氏名・性別・年令・電話番号・職業を付記して投函。産地特産品・飲食品・化粧品・家庭雑貨類などなど賞品は幅広く用意されていた。

これが面白いことに結構当選するのだ。

「こまめによくやるよ、まったく」

テーブルのこれから出す数枚のはがきを見ながらあきれたように話す陽介に

「私って、くじ運は強いのよ」

と自慢する傍からすぐに但しがついて「あなた以外はね」と陽介に指を突き出す。

実益を兼ねたこのアンケートはがきであったが、家族の名前を出すにはさすがに躊躇したところもあつたようで、「飼い犬の名前（マサヨ）を娘の「雅」と自分の「世」から「雅世」と漢字に置き換えて出していた。年令は応募し始めてから四年経った今もずっと二十歳、未成年だと応募が面倒だったからだ。職業は家事手伝い。

そうこうしているうちに「平井雅世」名で色んな郵便物が届いたり、あちこちから電話が掛かってくるようになった。こちらは郵送料が不要だから気楽に出していたのだが、もしかするとこうしたはがきを回収している業者があつて、回りまわりあちこちに流れてい

るのではと。この見方は正しいと言える。「雅世」という架空の名前でくるわけだからだ。ただ電話だと娘の「雅代」と一緒だし、それに自分の「麻世」と紛らわしいのが難点でもあつた。「だけどまあいいか」物事を良いほうに解釈しがちな麻世は、賞品が当たる嬉しさの方がそんな不安や不便に勝っていたのである。

通常、当選は賞品の発送をもって……とあるのだが、差出し先から、
「このたびはアンケートにお答えいただきまして大変ありがとうございます。抽選の結果、雅世様にご当選されましたのでお電話差し上げた次第です。大変おめでとうございます。早速ですが宅配便で記念品をお送り申し上げます。お届けはいついつ何時頃になる予定でございます。よろしくお願ひします」

などど丁寧にも連絡してくるところもあった。こんなことだから掛かってくる電話にも全く不審を抱かず受話器をとっていた。

今日もちよつと出かけてきただけなのに留守電に着信履歴がたまっている。それも大体が番号非通知。

一番多くかかる時間帯は夜八時以降。今もまたその例に漏れず、この時間一体どこから電話を掛けているのだろうか。

「◇◇化粧品でございます。マサヨさんでいらっしやいますか？」

「麻世は私ですけど」

麻世は（あさよさん？）と聞き違い、歳の割には子供っぽい声音で応じている。それに、（麻世は私です）と応じているのだが、先方は先方で先入観から「マサヨです」と答え

ていると錯覚しているようで、何の違和感も抱かず話しかけているのであった。

「二十代のお肌にぴったりのお肌を……スベスベとして……お肌の曲がり角に達しない二十一歳の今のうちに、一度お試しになっただけはいかがですか？」

（あつ、そうか、マサヨのことだった）と話の途中で気づくのだが、いまさら違えますって言うのも煩わしく

「あら！ お肌すべすべにと言われても、なしろ毛深いものですから……」

「……」

一瞬、会話が途切れる。

確かにマサヨは短毛で密集した毛並みをしている。でもこの手のダジャレは先方がどう思っているかは別に、こちら受けて側の気持ちとしては、とにかく早く受話器を置きたい

がためなのである。

またまたある美容系の会社から電話が掛かってきた。それにしても今日はやけに多い日だ。

「・・・食べながらダイエットをしませんか？一日三食きっちりお取りいただいてもダイエットは十分可能なんですよ」

「うちでは、一日二食なのよ。朝と晩のね」

「そんなに節制なさらなくとも普通でよろしいんです・・・ちなみに、三ヶ月で7キロの事例も」

「あらまあ、7キロも。困ったわ、7キロダイエットしたら無くなっちゃうもの」

マサヨの体重は8キロほどなのだ。

先方は、茶化した返答には耳慣れているとみえて

「そうなんです。どこへ消えたかと思うほど効

果は目にもはっきりとあらわれます」

「おい、もういい加減にしろ、いつまで話しているんだ！」

食卓で手酌酒の陽介が怒り出す。

「ことの成り行きでなかなか切るタイミングが掴めないのよ。それに向こうも次々と話して切らしてくれないの」

ようやく電話から解放された麻世がぶつぶつ言いながら戻り陽介にお酌する。

会社の若い奴が、女性からの電話で呼び出され、喫茶店で幸福を呼ぶ数珠を買わされそうになった。マニュアルで訓練された専門家にはとてもじゃないが素人はかなわない。それに近頃はオレオレ電話だ、お前は騙されやすいタイプだから気をつけるよ、と陽介。

そうそう、そう云えば今日こんな封書が届いていた。

宛先は、平井雅也様。封書の表面には四角い縁取りで「重要」と印刷されている。差出人を見ると、所在地と社名が印刷されていた。

聞いたことも無い名前であったが、麻世がまた何かの景品が当たったのかと思いい封を開けてみると、中から「未納通知書」なるものが出てきた。

そこには、

『あなたが利用された有料情報サイトの未納料金についての債権を情報提供先より譲渡致しました』とあり、その下には情報提供会社の名前それもアダルト系がずらりと記載されていた。

そして、

『未納料金（延滞料を含む）

¥ 9 8 , 0 0 0 円 』

右記金額を現金書留にてお送りください。

郵便番号 〒 5 4 0 * * * *

大阪市 * * 区 * * * * * * * *

T E L (0 6) 6 9 4 1 * * * *

(社) □ ■ △ ▲ 協会

※本状到着後、3日以内を期限と致します
ご入金確認後、あなたの情報リストは登録抹消と致します。抹消後は文書にてご連絡させていただけます。

尚、本通知が放置されますとあなたの自宅もしくは勤務先への回収となり、回収手数料が加算されます。

(社) □ ■ △ ▲ 協会

債権整理回収部 担当者 山口哲夫

一瞬、金額に釘付けになった。こういう場

合封筒の宛名はもう記憶の片隅にいつてしま
うらしい。一体なんだこれは？ 文面を二回
三回と読みかえた。もしかして夫が？ そ
れとも雅代、呼吸が両肩に伝わってくる。三
日以内かと思いなながらあらためて封筒を手
にした。手書きの宛名は、はつきり「雅也」と
なっている。(んん 雅也?) どうも雅世の世
を也と見間違えて書いたようだが、それ自体
考えてみればおかしい。ハアハアと合点が
いき、それからは落ち着いて文面を見ること
ができた。

ギョロ目の「マサヨ」が、その短い前足で
キーを叩き顔に皺を寄せ真剣に画面を覗いて、
いるか？ コノー！
冒頭文言の、『…：債権を情報提供先より譲渡
致しました』

(もう少しマシな文章を書けよ！)

団体名入りの封筒をそして文書を作成し、
恐らく相当数分の郵便料金を支払い、アルバ
イトを使い手間ひま掛けていらぬ作業を重ね
たことだろうに、なんともはや…。
麻世は、未納通知書本文のどこにも宛名が書
かれていないことをいいことに、
「あなた宛に、こんな手紙が来てたわよ。何
か思いあたることあるんじゃないの？」
アルコールのきっちり行き届いた赤ら顔の
陽介に真顔で迫った。

娘の雅代が帰ってきた。そしてシヨルダー
バッグを下ろすなり不機嫌そうに言う。
「お母さん、先輩がこの前うちに(雅代さん
いらっしやいますか)って電話をしたら、(居
ません!)ガチャリって切られたって言うの
よ」

さざなみに

揺れる小舟か 人の世か

湖水（みず）の戯れ

波風紋様

さくら

完